HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ピースワンコ・ジャパンの活動 ： 広島県から犬の殺処分0を全国へ
Author(s)	大西, 純子
Citation	科学技術コミュニケーション, 23, 59-66
Issue Date	2018-07
DOI	https://doi.org/10.14943/85371
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71123
Type	departmental bulletin paper
File Information	07_onishi_59-66.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小特集ノート：寄稿

ピースワンコ・ジャパンの活動
～広島県から犬の殺処分０を全国へ～

大西 純子[1]

The Activity of Peace Wanko Japan:
Aiming to Reduce the Number of Dogs Killed in Public Shelters in Japan

ONISHI Junko[1]

キーワード：犬，ペット，殺処分

Keywords: dog, pet, killed in public shelters

1. はじめに

皆さん，こんにちは．私はNPO法人ピースウィンズ・ジャパンの中で，犬の事業である，ピースワンコ･ジャパンを担当しております大西純子と申します．ピースワンコ･ジャパンというプロジェクト名ですが，日本語の「ワンコ」という言葉を，世界の人が聞いても「ワンコ」と言えば「犬のことなんだな」と分かってもらえるように，日本での活動が世界に広まってほしいという願いを込めてつけました．

このプロジェクトは，「広島県から犬の殺処分０を全国へ」ということをモットーに活動しています．残念なことに日本では，私たち人間ととても近い存在にある犬という動物，あるいは猫という動物が，毎年，数万頭，行政によって処分されています．犬や猫は私たちが一番身近に接している動物であり，ペットとして飼った経験がある方も多いかもしれません．このプロジェクトでは，そんな動物達がなぜ殺処分されなければいけないのか，殺処分を回避するためにはどうすれば良いのか，あるいは，いたしかたのない殺処分とは何かということを考えています．

ピースワンコ・ジャパンの拠点がある広島県は，瀬戸内海の温暖な地域で，きれいな海があって，おいしい海産物がとれる，そんなイメージをお持ちの方も多いかもしれません．しかし，広島県はとても広くて，私が住んでいる神石高原町というところは，北海道と同じように雪が降る地域で，中国山地の入り口，標高700メートルの場所にあります．人口は9400人で，高齢化率45％という，典型的な日本の山間部の過疎地域です．この神石高原町は人工樹林が生い茂り，イノシシ，サル，ニホンジカ，キツネ，タヌキ，フクロウといった多様な野生動物と人が共生共存している地域です．時にはツキノワグマとも遭遇することもあります．この町の小学生の子どもたちは，ランドセルにクマよけのベルを付けています．私も神石高原町に住んで８年になるのですが，２度ほどツキノワグマに遭遇しています．私が四つん這いになったぐらいの大きさで，言い方は変ですが，丸々としていてかわいかったです．怖いという印象は生まれませんでしたが，「こんな近くに野生動物が出

2018年5月16日受納　2018年6月7日受理
所　属：1. 特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン　ピースワンコ・ジャパン プロジェクト
連絡先：pr@peace-winds.org

てくることになったんだ．何かがきっと，この山間部の小さな町でも変わってきているんだな」と感じました．

我々の団体はこのような場所に犬の保護施設を作ることになったのですが，まずその保護施設を作った団体の紹介をさせていただきます．私たちNPO法人ピースウィンズ・ジャパンというのは，1996年に発足した，今年で22年目を迎える国際NGO団体です．中東地域，イラクやアフガニスタンといった紛争地域での難民支援をはじめ，世界中の大規模災害，地震や津波，それから気象状況による被害などの災害に対して，これまでに28の国と地域避難民，難民と呼ばれる方々に対しての人道支援を行ってきました．最近だと，皆さんのご記憶に新しいのは，2018年2月に起こった台湾東部地震ではないでしょうか．あの地震の際も，避難所への物資支援や日本からの寄付を受け付ける窓口の開設などを通して，被災者の方々を支援しました．

2. ピースワンコ・ジャパンのきっかけ

図1　ハイチ地震での救助活動の様子

私たちNGOがなぜ犬の支援を始めたのかというと，2010年のハイチ地震の際の支援活動がきっかけでした．これは現場に到着して3日目に撮った写真です（図1）．倒壊した建物の瓦礫の中に，まだ多くの行方不明者がいるという状況で，捜索隊が行方不明者を瓦礫の中から探しているのですが，その合間をぬって犬たちが，この瓦礫の山をピョンピョンと跳ねるように走り回って何かを探していたのです．迷い犬でもあるまいし，と心配していたところ，その犬を連れている人たちに遭遇し，声をかけてみました．すると彼らはスイスからやってきた災害救助犬を伴った救助隊だったのです．その犬たちは災害救助犬で，瓦礫の隙間から中に閉じ込められている人の匂いを探知して，「ここに人がいる」ということを知らせ，人命救助を支援しているとのことでした．

私の家には物心ついた時期から犬がいて，私は毎日，朝起きてはその犬を散歩に連れ出し，朝ご飯をあげ，ブラッシングしてから登校する．帰ってきたらまた散歩に連れて行き，夕ご飯をあげ，一緒に眠るといった生活をしてきました．しかし，私の飼っていた犬は，いわゆる雑種でしたので，犬がそんなにすごい能力を秘めているとは思ってもみませんでした．私の中で，ただ単に「かわいい」「一緒に散歩すると楽しい」といった思いで飼っていた犬という動物が，こうやって瓦礫の中で人の匂いを探知して人命救助につながる，そんな仕事を行っていることを知り，大変驚くと同時に，ぜひ，そんな犬を育ててみたい，訓練してみたいという思いが沸々と湧いてきました．

そこで災害救助犬の育成を私たちの団体で始めたのでした．さて，皆さん，どんな犬が災害救助

犬の訓練を受けていると思われますか．災害救助犬には，いわゆる警察犬でよく使われているシェパードやボーダーコリー，ラブラドールレトリバーといった，働くことに向いている，いわゆる使役犬種といわれている犬種が多く使われています．そこで私たちも，最初は日本の中で使役犬種を作っているブリーダーの方々をいくつか当たり，災害救助犬になりそうな犬を探しました．しかし，訓練を始めるのに適している月齢で，私たちに譲ってもらえる犬には巡り合えなかったのです．しかし，既に団体としては訓練士を雇用して，訓練する場所も確保しており，またすぐに始めないと災害はいつ起こるか分かりません．特に日本の場合は，地震大国です．明日にでも災害が起きないとも限らない状況の中で，私たちは１日でも早くこの事業を始めたいと思っていました．

3. 殺処分される犬との出会い

どうやって優秀な災害救助犬になれる犬を手に入れることができるのか．ペットショップでも可能性をはらんだ犬はいるかもしれないけれども，でも，それは何だか違うんじゃないかとも思っていました．

そこで，私は広島県動物愛護センター（以下，センター）という施設を訪ねることにしました．センターでは，毎年たくさんの犬が収容されており，中には殺処分される犬もいるということを知りました．しかし，センターでは犬を譲渡する事業もしているということで，2010 年の 11 月にセンターを訪ねました．

センターを訪ねてみると，施設の中には譲渡対象となっている犬たちがいるエリア，それから殺処分対象になっている犬たちがいるエリアと二つに分かれていました．最初に案内されたのが，譲渡対象の犬たちがいる場所です．そこには生後３ヵ月ぐらいで，とてもかわいく丸々としていて人懐こくて，知らない私たちが入って行っても足元にじゃれついてくるような，そんな犬たちが３頭いました．もしかしたら，この子たちは訓練次第で優秀な災害救助犬になれるかもしれないと感じ，私たちは「この子たちを譲ってください」と，お願いし譲っていただくことになりました．

でも，３頭では心もとなく，もしかすると処分対象の中にも，訓練次第では救助犬になれる犬がいるかもしれないと考え，私たちは「殺処分対象の犬も見せてください」と，職員の方にお願いしました．すると，職員の方から「残念ながら，今朝，処分の日でしたので，みんな処分してしまいました」という言葉を聞いたのです．私は大阪出身ですが，小学校の修学旅行で広島へ行き，広島で核廃絶や，命の尊さ，平和というものを学びました．私にとってそのようなイメージが強かった広島で本当に動物の処分が行われているんだ，ということは大変ショックでした．

でも，それを知ったからには，なぜ処分をしなければならないのか，どういう犬たちが処分されるのかということを知っておく必要があると感じました．そこで職員の方にお願いをして処分している場所を見せていただくことにしました．中に入って行くと，ちょうどこのホールぐらいの大きさです．壁で３つに仕切られていて，順番に犬たちは端から部屋に入って行くのですけれども，そこには多い時だと 20 頭から 30 頭の犬が３つに仕切られた中に入っています．処分の日が近づくと，犬たちは部屋のこちら側にあるフェンスがボタン一つで自動的に動いて，奥へ追いやられていきます．奥の扉が開いて，犬たちは廊下へ出るようになります．そして，今度は廊下の端からまた壁がボタン一つで自動的に動いていて，どんどん廊下の奥へと追いやられて行くのです．その行きつく先というのは，ドリームボックスと呼ばれるガス室，そこで二酸化炭素ガスによって犬たちは窒息死する，という話を聞きました．

私たちは世界中で人道支援という活動を行ってきて，人が人の命を奪うという現場をいくつも目にしてきました．しかし，「平和な国と言われている日本の中でも，動物に対してはこういうことが

図２　保護された時期の夢之丞

行われているんだ」という事実に言葉が出ず，本当にギューッと身体の中をつかまれるような，そんな思いがしました．

そのセンターで出会ったのが，この写真にあります「夢之丞（ゆめのすけ）」という犬です．彼は処分の対象になっており，本来であれば，その日の朝，処分されるはずの犬でした．でも，どういうわけだか，彼はその日の処分を免れて，処分される場所を見たいと言った私と出会うことになったのです．夢之丞は，ガス室の横の小さなケージに入っていてガタガタと身体を震わせていました．うちのスタッフがケージから出して抱き上げると，今度は自分がそのガス室に送られると思ったのか，お漏らしをしてしまいました．職員の方からは，「この犬は救助犬には無理ですよ．とても臆病ですし，人に懐くことも難しいだろうし，おそらく野良犬の子犬だと思います」と言われました．でも，次の処分の日に処分されるという現状を知った以上，私は彼を連れて帰らないわけにはいかないと思い，引き取ることにしました．そして，殺処分寸前のところから生還したということと，私たちの夢と希望を託す意味を込めて「夢之丞」という名前をつけました．

夢之丞と出会って７年と少しが過ぎましたが，いまでは広島土砂災害をはじめ，ネパールの大地震，台湾の台風，熊本地震，福岡の朝倉市での土砂災害といった災害現場に出動し，行方不明者を捜索しています．広島土砂災害では１名の方を発見するといった，そこまでやってくれる犬になりました．

何が言いたかったかというと，人によって奪われそうになった命，この犬ですが，でも，この犬の命を輝かすこと，社会に役立つ犬に育てることができるのも，また人なのだなということを私はここで彼を通じて学びました．

4. 殺処分の現状と推移

５万 5998．この数字は何でしょう．これは 2016 年度，全国の動物愛護センターなどで処分されている犬と猫の数です．犬が１万 424 頭，猫が４万 5574 頭です．365 日で割ると，日本では１日におよそ 153 頭の犬猫がいまだに処分されています．中でも広島県は，2011 年度に犬猫殺処分数が全国ワーストを記録したことがあります．その当時，１年間で 8342 頭の犬猫が処分されてしまいました．

では，愛護センターに入る犬猫たちというのは，どういうものか．これは広島県の場合（図３）です．黒い枠で囲ってあるところが飼い主から引き取った犬と猫です．その他のところは，所有者不明と呼ばれている飼い主が分からない犬や猫です．犬を見ると，ほとんどが所有者不明です．所

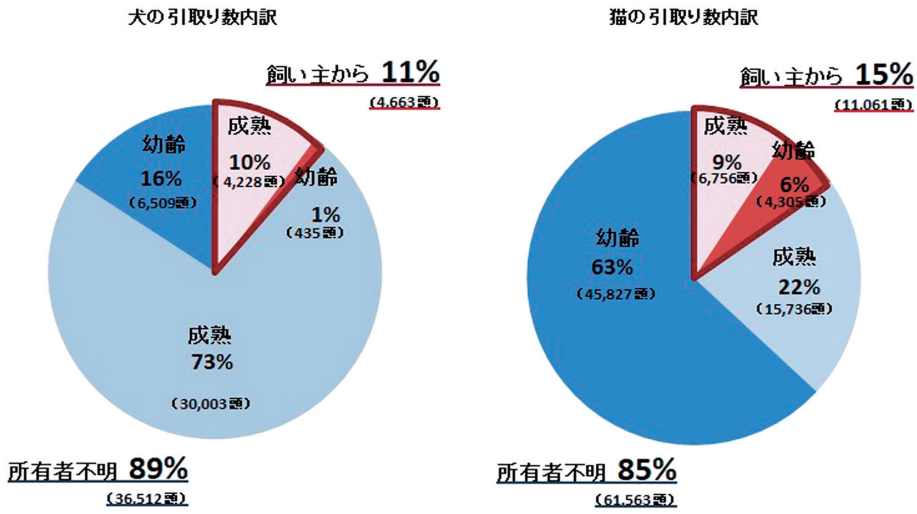

図３　広島県動物愛護センターに収容される犬・猫の内訳

有者不明の犬とは，首輪がついていない犬，明らかに人を怖がる犬，人から逃げる犬，野良犬たちから生まれた子犬のことです．首輪こそ付いていないが飼われていたであろうという迷い犬も，この所有者不明の中に入っています．

そして飼い主から犬が持ち込まれる理由で，最近一番多いのは高齢者が持ち込む場合です．高齢者が一人暮らしは寂しいだろうからといって，犬や猫を飼い始める．でも，やがて高齢になったり，病気になったり，介護が必要になったり，あるいは亡くなったりという理由で，犬や猫たちがそのまま残されてしまうことがあります．本来であれば，飼い主の息子さんや娘さんが引き取って飼ってくだされば良いのですが，息子さんや娘さんは町に住んでいたり，犬猫が飼えないマンションに住んでいるといった事情があり，引き取ることができない場合があります．心苦しいけれど，処分してもらおうということで，センターに持ち込まれるということが多くあるそうです．

あるいは，飼い始めたのは良いけれども，子どもにアレルギーが出てしまったとか，犬のしつけを間違えてしまって，とてもよく吠える．近隣から苦情が出る．あるいは家族がみんな噛まれてしまって，とても触れる状況ではない．だから「引き取ってください」と言って持ってこられる方も，まだまだいらっしゃいます．

猫の場合は，幼齢の子猫が持ち込まれる場合が多いです．「自分のところで猫を飼っているのだけれども，その猫が外から帰って来ると，お腹が大きくなっていた．自宅で出産し，親猫は飼えるけれど，子猫までは飼えない」と言って子猫を持ってくる．あるいは「公園で猫に餌をあげているのだけれども，その猫たちがどんどん子猫を産んで増えて困る．だから子猫を処分してください」と言って持ってくる方もいらっしゃいます．

全国の犬猫の引き取り頭数は昭和 49 年から統計されています（図４）．日本では昭和 25 年に施行された狂犬病予防法によって，所有者の分からない野良犬は捕獲されて処分するということが義務付けられました．棒グラフの下の部分は犬の殺処分件数で，上の部分が猫です．昭和 48 年には動物の愛護及び管理による法律が施行され，飼い犬の放し飼いなどが減り，最初は犬の処分数の方が多かったのですが，途中で犬と猫の殺処分数が逆転します．それがちょうど平成に入ったあたりのバブルの時期です．バブル期の前まで，猫たちは空き地や家の軒先などに住んでいました．ところがバブルになり，ビルが建ち，マンションが建ち，猫たちの住むところが無くなったのです．そ

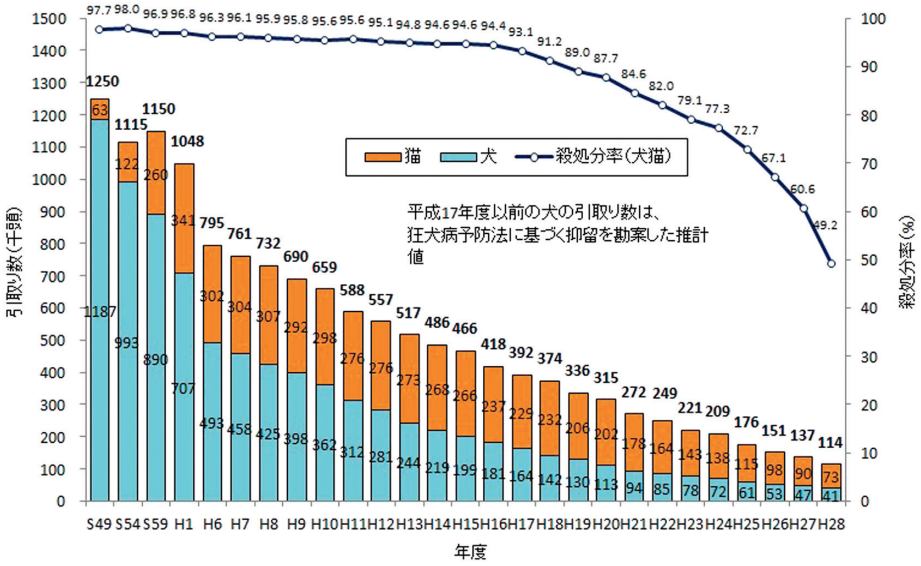

図 4　全国犬猫引き取り頭数及び殺処分率

こで猫たちは餌がたくさんある繁華街へ行き，飲食店の裏のゴミ箱をあさるようになりました．そうすると飲食店から苦情が出て，捕獲されて処分されることが増えたのです．

現在，引き取り頭数は減ってきてはいるものの，殺処分の割合は最近まで 80％を割りませんでした（図 4）．つまり，今まで収容された犬猫たちは，ほとんどが処分されていたということになります．ようやく 2 年前に殺処分の割合が 50％を切りました．その背景には東京オリンピック誘致が関連します．東京オリンピックの誘致のニュースが流れると，「でも，オリンピックが開催される都市って，町中の野良犬・野良猫の一斉捕獲があって処分されるらしいよ」という噂が SNS で流れました．そして，「殺処分って良いことなの？　悪いことなの？」という議論が，どんどんネット上で行われるようになりました．その議論を見た人たちが「よし，保護活動をしよう．殺処分することは，いけないことだ」「犬や猫たちを飼うのであれば，そういった保護された犬や猫たちをもらおう」といったムードになり，近年殺処分の割合が減っているのです．

5. 広島での取り組み～社会・地域で役立つ犬を育てる～

広島県は，私たちが活動を始めた当初というのは 2342 頭もの犬の処分がありましたが，私たちの啓発活動や保護活動によって，処分の数は少しずつ減ってきました（図 5）．2016 年度からは，「犬の殺処分を 0 にする」「愛護センターに収容された犬たちを保護して，新しい家族に引き渡す」という活動を行うことにより，何とかここ 2 年は殺処分 0 を維持しています．

私たちは保護した犬たちを新しい家族に引き渡すという活動をしているのですが，ただ単に「殺処分を免れたから，かわいそうだから飼ってください」ではなくて，犬という動物がどんなに素晴らしい能力を持っていて，その能力を生かすことにより，社会に役立つ犬になる，ということを同時に提案しています．災害救助犬もそうです．シェパードでないと災害救助犬はできないわけではなく，雑種でもトレーニング次第では災害救助犬のような仕事をすることができます．また，現在低血糖アラート犬といって，血糖値が下がったことを教えてくれる犬を訓練しています．低血糖が

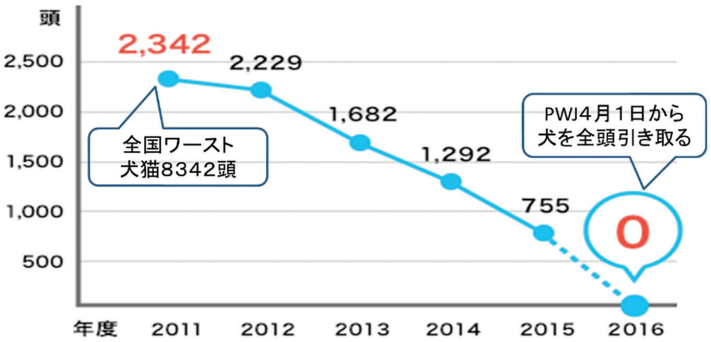

図５　広島県の犬の殺処分数の推移
（2015 年度は 4-12 月の速報値をもとに推計）

起こると，呼気からイソプレンという成分が出るのですが，それを犬が感知し，「血糖値が落ちているよ」と知らせてくれたり，あるいはブドウ糖を咥えて持ってきてくれたり，人を呼びに行ってくれたりして，飼い主を低血糖の状態から救う仕組みです．アメリカでは自動的に病院に電話がつながるようなボタンがあって，そのボタンを押してくれる犬もいるそうです．

また今日のシンポジウムでも話題になった，害獣駆除の対策としての事例もご紹介しましょう．それは保護した犬を里守り（さともり）犬に育成するという活動です．「里を守る犬」と読んで字のごとく，里守犬は里を守る活動に携わります．自然と人間の暮らしが隣接する地域では，里と山を隔てる境界線というものが存在します．私たち人間が暮らしているのが里です．そして，野生動物が暮らしているのが山です．以前は，それこそ狂犬病予防法や動物愛護法が施行される前は，その境界線に犬が縄張りを作り，結果的に野生動物から里を守ってくれていました．犬たちが，境界線をパトロールすることによって，サルやイノシシやシカたちが里に降りづらいという状況ができていたのです．

しかし動物愛護法という法律ができたことにより，「犬はつないで飼いましょう」ということになり，庭先にチェーンでつながれて飼われるようになりました．すると，野生動物は「あ，犬がいる」と最初は思い警戒するのですが，「あれ？　あの犬，あそこから動けないんだ」ということに気が付くと，「何だ．あいつ，動けないんだったら，近くにまで行ってやれ」と，例えばサルが庭先にある果物を全てとってしまったり，イノシシが畑の作物を全て掘り起こしてしまったりという事態を招くわけです．そこで「もう一度，犬たちにパトロール隊をやってもらったらいいのでは」というのが，里守り犬活動の発端です．

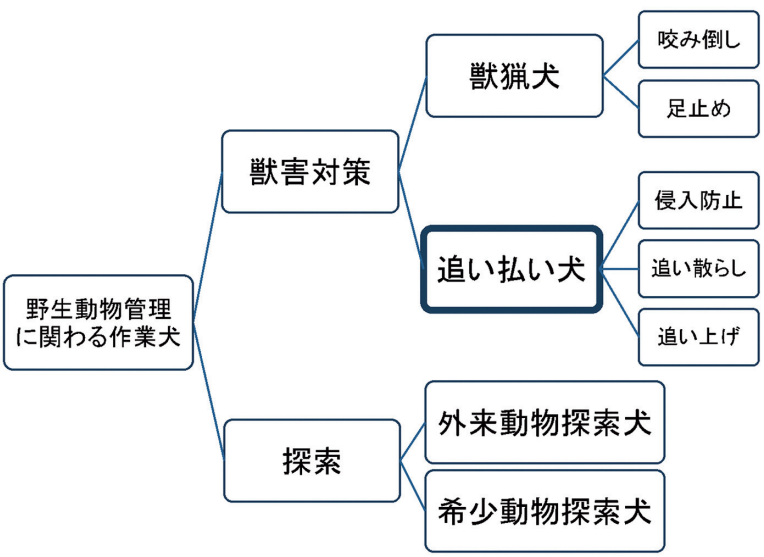

図６　野生動物管理に関わる作業犬の分類

「野生動物管理に関わる作業犬」には，「獣害対策」と「探索」という２種類の活動があります（図６）．ヨーロッパなどでは，「探索」活動の方がよく行われており，「外来動物探索犬」とは，外来動物を探索し駆除を支援する犬です．例えば，池田先生がシンポジウム

で言及されていたアライグマ探知犬というのも，ここに属する活動です．また，「希少動物探索犬」というのは，スウェーデンで，絶滅の危機にあるオオカミを保護するために，犬にオオカミの臭いを追わせて，生息地域を特定し，そこを保護区として守るという活動が行われています．

一方，「獣害対策」のために犬を使う活動には，「獣猟犬」と「追い払い犬」という活動があります．日本ではあまり行われていませんが，「獣猟犬」とは直接犬が特定の野生動物を射止めるという活動です．訓練が難しく，また犬が怪我をする恐れもあります．一方，「追い払い犬」という活動は，山から降りてきた動物に対して，「君たちの住むところは，ここじゃないよ．もっと向こうへ帰ってね」という警告を犬が発するという活動です．「侵入防止」，「追い散らし」，「追い上げ」という活動の種類があり，「侵入防止」というのは里の区域にバリアを作る，いわゆる縄張りを作る活動の事を指します．「追い散らし」というのは，害獣を追っ払う活動です．例えば，「サルを見かけた」という情報をもらうと，私たちは犬を連れて行って，その「見た」と言われているところからサルの臭跡を追い，サルの跡をずっとトラッキングしていきます．運よくサルと出くわしたら，そこで犬のリードを離してワンワンと追い散らします．もしサルと出会わなくても，トラッキングをすることによって，サルが通った道に犬の臭いをつけて，サルに「あそこに行くと犬に追われる」ということを知らせ，サルにその地域に行くことを避けさせます．

「侵入防止」の活動の一環として，今日も，一般の飼い主さんが「DOG TRAIL：里を犬と歩く」という活動が実施されています．図７のように，普通の飼い犬をお散歩させるだけの活動です．この活動には毎回 30 組ぐらい参加するのですが，山と里の境界線を人と犬がゾロゾロと歩くことによって，犬と人が境界線に臭いを落としていく．そうすると，野生動物たちは「あ，ここは人と犬の縄張りがある．入ってはいけない」と感じて出て来なくなるのです．実際，この地域で１年間，この活動をしたところ，「サルが降りてこなくなった」と，地域の方におっしゃっていただくようになりました．

犬たちも普段，町の中のアスファルトのお散歩だけでは実はつまらなくて，こうやって時には山の匂いを嗅ぐ，野生動物の臭いを嗅ぐことがいい刺激になるのです．これに参加した飼い主さんから，「うるさく暴れて困ってしまう犬でも，この DOG TRAIL に参加した日は，家に帰るとぐっすり寝てくれた」というお話をいただきます．１時間のお散歩は犬にとっても良いトレーニングになると同時に，人にとっても健康にいい活動になっています．

図７　DOG TRAIL の様子

私たちはこの DOG TRAIL という活動を，これからもどんどん続けていきたいと考えています．そして，今後は，サルを追い上げていくというプロフェッショナルなモンキードックを作ることによって，野生動物と人とが共生していくために犬を役立てていく，そんな活動も計画しています．以上です．